

戦前から戦後の建築雑誌に現れた建築思潮 その1

○ 正会員 近藤 正一 \*1  
同 張 健 \*2  
同 若山 滋 \*3

カテゴリー分類による時代的変遷

【序論】 建築家は、その理念・思想を建築作品とともに言語活動において表現している。建築雑誌は、言語活動の場として重要な媒体の一つであり、そこに発表された建築家及び評論家の言説を採ることは、建築界の時代思潮を探る有力な方法である。また、太平洋戦争は日本にとって大きな転換期であり、建築家にも大きな影響を与えたと考えられる。そこで、本研究では、戦争による影響が強くなり始めた昭和11年から、戦後の混乱が落ちつきをみせる昭和30年までを一つの時代ととらえ、戦前から戦後の建築雑誌に現れた建築思潮の変遷を明らかにすることを目的とする。

【研究対象】 対象とする雑誌を、昭和11年から30年まで通して発行された『建築と社会』・『建築雑誌』・『新建築』の三雑誌とし、その中から当時の代表的な建築家および建築評論家による思想の明確に現れている評論を研究の対象とする。この結果、対象とした評論は計383となる。

【研究の方法】 1) 対象とする評論の中から筆者の建築観が明確に現れている部分をキーセンテンスとして抽出し、そこからキーワードの選定を行う。2) キーワードは38のカテゴリー1をふまえ、さらに18のカテゴリー2に分類する。3) 各カテゴリーの頻度について、統計的分析を行う。4) カテゴリーに基づいて建築思潮の変遷を考察し、時代区分を行う。

【カテゴリーよりみる建築思潮の時代的変遷】 各カテゴリーの数量的変遷と言説の変遷の分析より、次のことがいえる。

1) 戦争中は、「イデオロギー」・「建築家」・「近代」が減少している。これは、この時期における言説の主題が建築の近代化、合理化といった内容から高度国防国家建設に移ったことによる影響である。2) 昭和14年から15年にかけて、「環境」・「国際」・「都市」が増加している。これは、この時期に大陸建設における住環境や都市計画が言説の主題となったことが影響している。3) 昭和16年以降、「様式」が増加し、戦争終了の直前にピークを迎えている。これは、決戦態勢が強まる中で、伝統的な民族建築を大東亜建設理念の現れとして求めようとした影響である。4) 昭和20年の終戦を境に、「国

表-1 キーワードのカテゴリー分類

カテゴリー2	カテゴリー1	キーワードの例	
イデオロギー	イデオロギー	運動、イデオロギー、分離派、セセッション、イズム、アブレゲル、反対論	
科学技術	科学	科学、エネルギー	
	技術	技術、機械、航空機、精密機械、エンジニア、自動機械、専門家、カンティ・レヴァ式、インダストリアルデザイナー、missing technician、発明	
環境	自然環境	気候風土、地震、災害、自然、火災、一般的環境、環境条件、環境、震災、地方的性格、耐震の見地、地理的	
	人間環境	生物学的能力、休養、生活環境、尺度、生活慣習、人間能力、住居状態、国民生活、住生活、人間性、人間生存、生活空間、衣食住、生活時間、住居地区	
	設備	設備、家具、道具、冷暖房	
教育	教育	教育、教養、教育、カリキュラム、生徒、学校、教師、指導、修養、養成	
	学術	学術、分析、研究、探求、考案、学問、学者、物理、工学、生活学、文学、人文、調査、計算、算式、考究、資料、知識、社会学、習熟、論証	
近代	近代	近代建築、近代的、高層化、モダン、新建築	
	機能	機能、合理、大単位、実用、効果的、高度化、便宜	
経済	経済	経済、支出、商人、貧乏人、商品、商業、失業、業務、費沢、営団、経営、資本	
	生産	生産、労働、工業、作業、配給、食料、復員、専業、造営、業界、作業、営繕事業、労働者、手工業、協働者	
芸術	芸術	芸術、彫刻、絵画、美、庭園、文芸、美学	
	建設	建設	建設、工事現場、土木、建築物、新築、土地、構築、用地、造家、大工
		建物	建物、屋根、柱、地下室、廊下、調理室、平均床面積、壁体、細家、トーチカ
建築家	施設	施設、工場、港湾、鉄道、歩道、アウトバーン、車庫庫用路、広告塔	
	建築家	建築家、設計、計画、配置、デザイナー、建築士、企画、作品	
	建築界	建築界、ディスカッション、討論、学会、contest、ギルド、論議	
構造	形態	形態、デザイン、造形、意匠、形、オーガナイズ、甲板、organization	
	構造	構造、木造、組立、鉄骨、RC造、構成、セメント、石炭、高層化、構法、カンティ・レヴァ式	
国際	材料	材料、木造、資材、コンクリート、磁、資源	
	国際	国際、対外、満洲、独逸、アウトバーン、南方諸域、米英露、東洋、西洋、全人類、外來、外國、國際、欧米、支那、西歐、世界、太平洋圈、アジア、世界史	
国防	日本	日本	
	民族	民族、日本人、アメリカ人	
国防	国防	国防、統制強化、戦時建築、導入蓄積、導入補填、戦線、武器、国土、生活戦、東亞、一億国民、破開、南方諸域、消防、北方的、防衛力、地下工作、号令	
	社会	社会、厚生、保健、公共、衛生、コミュニティ、団体、組織、権威、特権、階層、尺度、上層、下層生活者	
社会国家	国家	国家、本土、国民権式、憲法	
	政治	政治、施策、方策、政府、ポツダム宣言、官制、官公庁、与論、秩序、交渉、実施、対策、立案	
	法規	法規、規定、標準、規程、メートル法、規格、統制、制約、憲法、法制、基準法、契約、mechanic's lien、業法、単位、条項、制定	
住宅問題	住宅問題	住宅問題、住生活、バラック、居住、安住、アパート	
	住居	住居、質的改善、柱、間取り、台所、畳	
都市	都市	都市、既成都市、農村、市街地、郊外、都会	
復興	復興	復興、再建、仮設	
文化思想	文化	文化、普及、博覧会、飛行、リクレーション、文明、図案募集、世俗、生活慣習、椅子式、婦人雑誌、生活様式、食形式、風俗、儀式	
	思想	思想、保守的迷宮、民主改命、知性、感性、創造、理念、倫理、民主、マンネリズム、平和的進路、空間、時間、モダニアキテクチャー、机上論、建築精神、アブレゲル、アイデア、良心の啓蒙、理想、主義、理論、構想、人間生活導、概念、紀念性、信仰、渴仰	
	様式	様式、日本建築、既存形式、クラシック、ゴシック、国民様式、近代様式、戦時建築、第六期建築、古建築、支那建築、生活様式、近代建築、日本国民建築様式、サロン建築、模倣、形式、様式、寺社宮殿建築	
歴史	歴史	歴史、法隆寺、伊勢神宮、遺産、復古、時代、古典、種民地侵略、十九世紀的、旧、新、古代、中世、近世、建築史、運動期、豊臣遺跡、石器時代、世界史、ルネサンス	
	伝統	伝統、工匠、古来、格式、復古	

View of architectural thought on magazines of architecture before and after wartime part 1

The change of the *discours* grouped by the categories

KONDO Shoichi, ZHANG Jian and WAKAYAMA Shigeru

防」と「復興」が入れ替わっており、言説の主題が高度国防国家建設から国土再建へと移ったことを示している。5) 終戦直後、「構造」が減少しており、言説の中でも復興に対して現実的な具体策について触れていない。そこには、この時期に建築界が国土再建の見通しの混乱の中にあつたことが現れている。6) 終戦後、昭和22年から「社会国家」が増加し、昭和23年にピークを迎えている。これには、住宅の建設に対して国家資本の全面的投入が求められたように、各種の問題に対して国家的解決への期待が高まっていたことが影響している。7) 昭和26年以降、「建設」・「建築家」・「構造」が増加している。これは、各種制限の終了とともに高層化に関する言説が多くよせられたことから、本格的建設が始まったことによるものといえる。8) また、昭和11年から30年までを通して「都市」・「住宅問題」が類似的な変化をみせており、この時期において、「都市」と「住宅問題」が高い相関性を持つものとして認識されていたことがわかる。

【各時代の言説の構造】 以上の考察をもとに、第1期から第6期までの時代区分をおこなった。

(第1期) 昭和11年から13年には、建築の合理化や科学振興などの動きともなう近代化へのあこがれや国際意識といった思想が存在するが、これらは高度国防国家の建設と国民生活の建設などの概念からなる大東亜建設理念から大きな影響を受けている。この影響は第2期・第3期にも現れている。また、高度国防国家の建設を行うとすることで、資源の使用に関する各種の制限法と不燃化された防空建築を実践することは、第1期から第3期まで矛盾関係を示している。

(第2期) 昭和14年から15年は、第1期にみられた大東亜建設理念による影響により、科学を振興させる動きが大東亜建設理念に基づくものへと変化する。また大陸における建設活動が国際意識と大東亜建設理念を結ぶものとして存在するのも、第1期における大東亜建設理念の影響による。

(第3期) 昭和16年から20年は、第2期にみられた変化を引き継いで、科学が大東亜建設理念に基づくものとして進行している。国際意識と大東亜建設理念を結ぶものとして民族意識が存在するのは、決戦態勢が強まるとともに、第1期からみられた大東亜建設理念による影響がさらに強まり、伝統的な民族建築を大東亜建設理念の現れとして扱ったことによるものである。また、決戦態勢の強まりによる影響は、戦時建築規格が各種制限法と防空建築の実践における矛盾を広げたことにも現れている。

\*1 名古屋工業大学助手・修士(工学)

\*2 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士(工学)

\*3 名古屋工業大学教授・工学博士

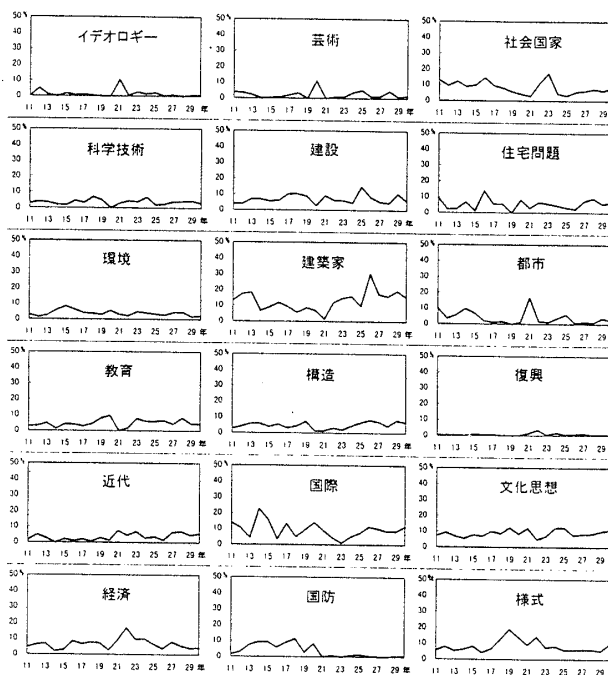


図-1 各カテゴリーの変遷

(第4期) 昭和21年から22年は、建築界全体が国土再建の見通しに対して混乱状態にあつたことから、この時代においてはまだ非現実的であった大都市反対論が唱えられるなど、国土再建が国家的な解決への依存を強めている。

(第5期) 昭和23年から25年は、第4期において国土再建における国家的な解決への依存が強まったことを受けて、国家的な解決が国土再建の中に不可欠なものとして取り込まれる。こうして国家的な解決、民度の向上を求める動きと文化的な復興を行うことを含んだ国土再建が推し進められ、その動きを方向付けるものとしてヒューマンイズムが影響を与える。この影響により、封建制の排除を問題として抱える建築の近代化・住宅・教育における変化を求める動きがみられ、建築と社会の変化との結合が要求されている。

(第6期) 昭和26年から30年は、各種制限が終了される時期にあたる。これともなう本格的な建設の開始において、建築の高層化や新構造材料の使用を求める動きからなる建築の近代化と、建築の経済化やヒューマンイズムからなる現実の国民生活との結合が要求され、これらの矛盾点として建築の高層化に伴う問題が指摘されるとともに工業主義的なものとして扱われ、それに対し、民族的なものとして小住宅設計や日本調のデザインが注目を浴びている。また、国際意識の中でアメリカとの比較が行われることにより、近代化の遅れが指摘されている。

Research Assoc., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.  
Dr.'s course, Nagoya Institute of Technology, Master Eng.  
Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.